

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13860

研究課題名（和文）農山村移住者のライフコース研究：後期近代における再帰的な地域移動の分析

研究課題名（英文）Life Course Study of Rural Migrants: Analysis of Recurrent Regional Migration in Late Modernity

研究代表者

畑山 直子 (HATAYAMA, Naoko)

日本大学・文理学部・研究員

研究者番号：10732688

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、農山村移住者のライフコース分析を通じて、後期近代における再帰的な地域移動を実証的に明らかにした。主に農山村移住者を対象にしたライフヒストリー・インタビューの手法を用いて、移住者の移住の背景、移動のタイミング、移動の過程などを分析し、移住者が最適であると考えられるライフスタイルを確立する過程で、移住先への定着をも模索・決定していくことが明らかになった。また、移住者の受け入れ側である地域では、各自治体が移住者や移住希望者のフローを自治体単位で把握するようになってきていること、また当初不動産業者等が主導してきた移住支援も、自治体との役割分担が明確になり、専門分化が進んでいることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、農山村移住者のライフコースと地域の文脈という双方向的な視点から農山村移住を分析したことで、移住者のような流動的な存在を前提にこれからの地域社会を理解する必要性を説くことができたといえる。今後、人口減少がさらに進行する日本社会においては、定住者に限らず、人びとの往来が地域の維持には不可欠になるだろう。さらに、農山村移住者のライフコースは、現代社会における多様なライフコースの一側面を示しており、高度経済成長期に確立された公的ライフコースがいかに変容しているのかを捉えることに寄与するといえる。

研究成果の概要（英文）：This study empirically clarifies recurrent regional migration in late modernity through a life course analysis of rural migrants. Using life history interview techniques mainly with rural migrants, I analyzed the background of migration, timing of migration and process of migration. I found that in the process of establishing a lifestyle that they consider optimal, migrants also seek and decide to settle down in Chichibu areas. It also became clear that in the regions that host migrants, each municipality has come to understand the flow of migrants and prospective migrants on a municipality-by-municipality basis, and that migration support, which was initially led by real estate agents and others, has become more specialized with a clear division of roles with the local municipality.

研究分野：社会学

キーワード：農山村移住 地方移住 ライフコース ライフスタイル 生活史 地域おこし 移住促進事業

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、農山村移住者のライフコース分析を通じて、後期近代における再帰的な地域移動を実証的に明らかにしようとした社会学的研究である。本研究課題を申請した 2010 年代後半は、日本の総人口が減少に転じ、農山村を中心とした過疎地域の深刻な人手不足や集落の衰退が問題化され始めていた。その状況を受けて、政府や自治体による「地方創生」事業が開始し、移住定住促進事業や地域サポート人材の支援策など、さまざまな施策が整えられ、研究においては「田園回帰論」が農山村における諸事象の分析を行っていた。それらの分析は、地域社会が今まさに直面している課題を正面から取り上げ、人口、産業、政策といった多領域から農山村移住にアプローチしており、大変厚みのある研究が多かった。

しかし、地域活性や地域おこしなどの政策的な側面との結びつきを強くもつ田園回帰論だけでは、なぜ都市住民が衰退・消滅の危機に直面する農山村へ移住していくのかを十分に理解することができなかった。農山村への移住は、1970 年代の学生運動やヒッピームーブメントの流れを汲む、思想的な参入という系譜の中にあり、常に主流の都市移住と対比されてきたことも踏まえると、現代の都市あるいは地域社会の文脈を捉えながら移住者の移住という選択、また移住後の暮らしについて理解する必要があると考えた。

そこで、本研究では移住者のライフコースに着目し、移住の背景やタイミング、移動の過程を分析することで、現代の農山村移住を捉えようと試みた。調査対象地域は、2012 年からフィールドワークを続けてきた埼玉県秩父地域である。秩父地域は市部と中山間部で構成されており、農山村移住の就労・生活実態と都市とのネットワークを含めたライフコース調査を行う地域として最適であると判断した。また、比較分析のために、山梨県中北地域と長野県松本地域の 2 地域も当初調査地域に加えた。

2. 研究の目的

本研究は、農山村移住を取り巻く現状を踏まえ、移住者の移住背景や移動の過程にフォーカスしたライフコース分析を行うことから、農山村移住を「再帰的な地域移動」として明らかにすることを目的とした。

A. ギデンズは、後期近代という時代は、「脱埋め込み」の広がりによって人生と場所が切り離され、個人の人生計画に応じて居住地を選択していくようになると述べているが (Giddens 1991=2005)、これは従来の標準的なライフコースのように、誰もが予め指定できるルートを歩んでいく時代から、自己を再帰的に構築する時代への移行を示している。すでにヨーロッパでは、都市住民が自己の再帰的モニタリングを行った結果、生活の質の向上を目指して田園に移住し始めた事例が紹介されている (Benson & O'Reilly 2009)。

そこで、本研究では、農山村移住を自己の再帰的プロジェクトにおける人生設計の問題として捉え、農山村移住者に対するインテンシブなライフコース調査から、ライフコースにおける移住の意味づけを明らかにすることを試みた。秋津元輝が指摘するように、農山村へのイターン者の人生計画には、「現代社会における人生が典型的に表現されて」おり、長期的な視点で「イターン者の人生構想全体における移住の意味を考える」ことが可能である (秋津 2003)。本研究は、農山村移住者のライフコース分析を通じて、農山村移住の背景を理解し、後期近代における「再帰的な地域移動」がいかにして実践されているのかを分析しようと試みた。

3. 研究の方法

本研究は、農山村移住者を対象にしたライフヒストリー・インタビューの手法により、研究の目的を達成しようと試みた。

具体的には、フェイス項目（性別、出生年、出生地、家族構成、前住地と移動経歴、世帯収入） 地域移動のタイミング・移動過程に関する項目（移住を決めた時期と移住までの過程、移住を実施した時期） 就労に関する項目（業種、職種、職場の所在地、兼職や臨時的な仕事の状況、本社とサテライトオフィスの関係） 都市とのネットワークに関する項目（大都市圏を含む都市との接触、これまでの都市における人間関係の持続）について聞き取りを行った。

4．研究成果

本研究では、農山村移住者を対象にしたライフヒストリー・インタビューの実施とその分析から、農山村移住者のライフコースにおける移住の意味づけを明らかにした。研究課題の申請時は、埼玉県秩父地域のほかに、山梨県中北地域と長野県松本地域の2地域を調査地として想定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、複数のフィールドでの調査を行うことができなかった。そのため、秩父地域における調査に限定し、研究を完遂することを最終目標とした。得られた研究の成果を、以下3点にまとめる。

（1）農山村移住者の移住背景・動機と移住後の生活パターンの析出

埼玉県秩父地域のうち、秩父市、横瀬町、皆野町へ移り住んだ10名のUIターン者のライフヒストリー・インタビューの分析から、移住の背景・動機と、移住後の働き方や暮らし方等の生活パターンを明らかにした。

まず、移住の背景・動機としては、移住前に暮らしていた都市部での働き方や商業主義的なモノの見方への疑問などが移住の動機になっていた。しかし、すぐに移住を決めるのではなく、秩父地域を定期的に訪れながら、移住後の生活のイメージを作った移住者もいた。また、移住を検討する中で、地域おこし協力隊制度を知り、定着するための足場を作るために協力隊の仕事を得た者もいた（地域おこし協力隊が初職であった移住者もいた点は重要である）。

また、移住後の働き方については、自営業や養蚕業に従事することで、それまでの雇用される働き方を辞めた者が多かった。また、地域おこし協力隊の任期後に、起業した者もいた。このような働き方を選ぶことで、初めは経済的な部分が必ずしも安定しないが、貯金の取り崩しや副業などを行いながら生活を構築し、数年かけて自分たちの納得のいく水準で生活ができるように変化していった。すなわち、移住者自身が目指す、あるいは最適であると考えられるライフスタイルの確立には一定の期間を要し、その過程で移住先への定着を模索・決定していくことが明らかになった。

（2）自治体の移住施策の特徴と課題

農山村移住者の移住後の生活を理解するために、移住者の受け入れ側となる地域の分析も進めた。本研究に着手した当初は、秩父地域において移住の受け入れ体制を整えている自治体はほとんどなかった。しかし、急激に制度を整え、担当窓口を設置するようになってきた。そこで、秩父地域1市4町すべてにアクセスし、移住担当の職員に対してヒアリングを実施した結果、各自治体が移住促進のための助成金やお試し居住などを導入するとともに、移住相談の窓口を設置して移住者や移住希望者のフローを自治体単位で把握するようになっていた。また、移住者の住まい探しにおいて、ちちぶ空き家バンクと連携しながら支援をしている一方で、地域内の空き家の利活用には大きな課題があること（空き家の新規登録が進まない、移住者の希望とのミスマ

ッチなど)も明らかになった。加えて、移住者の増加をダイレクトに目指す政策ではなく、関係人口を広く受け入れるような取り組みを行うことが、地域全体の活性化につながるという方針に舵を切りつつある自治体もあった。

(3) 民間企業による移住・創業支援の特徴と課題

移住者の受け入れ側となる自治体の分析に加えて、民間企業の移住・創業支援等についても関係者にヒアリングを行った。まず、空き家バンクは発足から10年が経過し、その間に各自治体の移住促進が進んだことで、これまで秩父地域の移住支援を牽引してきた空き家バンクの役割は変化してきた。特に、空き家バンクは不動産業務に徹するようになり、民間と行政の役割は専門分化しつつある。

また、秩父地域においてコワーキングスペースを経営する会社にヒアリングと現地視察を実施した結果、移住者も関連施設を活用していることが明らかになり、移住者の仕事・働き方について選択肢が増えてきたこと、また秩父地域の移住者や関係人口の増加により、移住者の社会的ネットワークが広がったことが明らかになった。

以上3点の研究成果から、本研究は現代の農山村移住を田園回帰論ではなく、移住者のライフコースと地域の文脈という双方向的な視点から理解することに寄与する。今後、人口減少がさらに進行する日本社会においては、移住者のような流動的な存在を前提に地域社会の在り方を理解する必要があるだろう。引き続き、秩父地域における移住の動向を追跡しながら、他地域との比較研究を発展させたい。

参考文献

- Benson, Michaela and O'Reilly, Karen. 2009, "Migration and the search for a better way of life: a critical exploration of lifestyle migration", *The Sociological Review*, 57(4): 608-625.
- Giddens, Anthony. 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. =2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社.
- 秋津元輝, 2003「Iターンの実践とIターン研究の実践」祖田修監修、大原興太郎・加古敏之・池上甲一・末原達郎編『持続的農業農村の展望』大明堂.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 畑山直子 | 4. 巻 199 |
| 2. 論文標題 地方移住者たちの「働き方」の探求 男性の労働問題から男女のライフコース選択の問題への転換 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 社会学論叢 | 6. 最初と最後の頁 1-17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 畑山直子 |
| 2. 発表標題 地方移住をめぐる移住プロセスの転換 |
| 3. 学会等名 日本都市学会第68回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 畑山直子 |
| 2. 発表標題 「地方移住の社会学」への挑戦 労働とライフコースという視点に辿り着くまで |
| 3. 学会等名 NPOサーベイ公開オンライン研究会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 畑山直子 |
| 2. 発表標題 Iターン移住者は「異端者」から「地域の担い手」になったのか |
| 3. 学会等名 2019年度日本大学社会学会大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 畑山直子 |
| 2. 発表標題 農山村移住者の働き方をめぐる選択 ライフコース・パターンの解明に向けて |
| 3. 学会等名 第91回日本社会学会大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| 「ちちぶ空き家バンク」が生み出す地域社会の好循環 https://ii-hikkoshi.com/nihon-u |
|---|

| 6. 研究組織 | | |
|---------------------------|-----------------------|----|
| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|